

2 . 構造と機能：構造 - 機能主義

一昔前（今でも？）社会学の主流といえば構造 - 機能主義[structural-functionalism]であった。

言い換えるならば、社会学的な理論をはみ出してしまうような理論なら何でも、機能主義の領域の外側にはみ出してしまうのである。（Davis[1959:760]）

この構造 - 機能主義を主導したのが、パーソンズ[Parsons, Talcott 1902-1979]と、マートン[Merton, Robert, King 1910-2003]の二人。

要するに、社会を構造と機能という側面から、分析していく視点。とりわけパーソンズは構造的な分析が有名であり、マートンは機能的な分析が有名（とされている）。

【余談：パーソンズとマートン】

この二人はハーバード大学で師弟関係にあった。パーソンズが師匠で、マートンが院生（しかも一番弟子！）。マートンの博士論文はパーソンズが指導した。パーソンズは、マートンを可愛がっていたんだけど、二人の間で意見が分かれたのをパーソンズは気にしていられない。

私がよく思い出すのは、1961年にワシントンDCで開催された国際社会学大会でのことである。マートンは、構造 - 機能主義 という表現に対してかなり強く反論を述べた。彼はとりわけ 主義 というラベルが付けられているのを嫌っていて、機能分析 というあっさりとした記述的な表現の方がより適切であると示唆した。私は、この判断に心から同意する。（Parsons[1975:67]）

じゃあ、構造と機能ってなんだろう？

2 - 1 . 構造[structure]：社会構造

パーソンズによれば構造とは

経験的根拠から、ある期間にわたって、特定の認識意図の条件の下で、安定であると仮定することができ、また安定であることが明らかであるような、生きたシステムの部分間のセット（Wallace and Wolf[1980=1985:40]）

一般的な社会学の教科書では、

社会構造とは、ある人々、すなわち小さな集団であるとか、全体的な社会のようなものに、社会的な組織の「骨組み」を与えるような、多くの人々の関係[relationship]あるいは位置[position]のパターンである。関係とは、人々が相対的に安定していて[stable]継続的な相互行為と / あるいは相互依存のパターンに参加するときにはいつでも存在する。それは例えば、対人関係的なレベルでの結婚や雇用関係、もしくは大規模で抽象的なレベルで言うなら、

現代社会の諸問題

教育や医療保険などの制度ということになるだろう。位置とは(それはしばしば地位[status]として言及される)、社会的な関係のネットワークの中に認識される場所である。それは、例えば母親、大統領、もしくは宣教師といったものであり、たいていは行動に対する期待(通常は役割[role]と呼ばれる)を担っている。(Calhoun et al.[1996:7])

またギデنزが書いた教科書には、次のように書いてある。

社会構造の概念は、社会が、行き当たりばったりの行為から成るのではなく、安定性のある、組織化された特質をもつという事実から由来する。社会の構造とは、人々が加わる社会関係の根底にある規則性、つまり様式をいう。(Giddens[1989=1992:基礎概念 5])

構造 - 機能主義においては、「システム」という言葉と「構造」という言葉が、同一(置き換え可能)なものとして使われることが多い。

ref.Giddens, Anthony 1977 *Studies in Social and Political Theory*, Hutchinson & Co.
=1986 宮島他訳『社会理論の現代像』みすず書房

ギデنزは、「機能主義 - 戦いを終えて」という論文で、「システム」と「構造」と「機能」という言葉の関係について語っている。

さて、「構造 - 機能主義」と言われるくらいだから、構造と機能は、相補的(相互的)な概念とされている。

z.b. パーソンズの社会システムの四機能パラダイム (A G I L 図式)

A(daptation) : 適応	G(oal attainment) : 目標達成	A(daptation) : 経済	G(oal attainment) : 政治
L(latent pattern) : 潜在的パターンの維持	I(ntegration) : 統合	L(latent pattern) : 教育、宗教、家族	I(ntegration) : 法律

(Wallace and Wolf[1980=1985:58])

構造が「安定的なパターンである」ためには、そこに秩序[order]が成立していて、それを規範[norm]が支えているという見解が強調される

= 保守的だと見られる(批判の対象)

パーソンズの議論は、抽象的で「誇大理論[grand theory]」であると言われる。ミルズ[Mills. Ch. Wright]が、第一に批判したのもパーソンズの議論。

この点で、マートンは、中範囲の理論[middle range of theory]を提唱し、機能への注目を促した。

2 - 2 . 機能[function]

機能についての説明は、マーソンの定義がとても有名かつ明確。

Merton, Robert King 1968 *Social Structure and Social Theory*, Free Press. =1969 森
他訳『社会理論と社会構造』みすず書房

2 - 2 - 1 . 機能分析の語彙

マーソンのよれば、社会学における機能的アプローチは、その当初から術語上の混乱に陥っていた。

単一の用語に多様な概念

・ 5つの意味内容

公共的集会 職業 ある社会的地位にある者 (数学的)関数

有機体の維持に役立つという観点からみた生命的または有機的過程

cf. ベルタランフィ[Bertalanffy, Ludwig von]や、キャノン[Cannon, Walter Bradford]
のシステム論

Bertalanffy, Ludwig von 1968 *General System Theory: foundations, development,
applications*, George Braziller, Inc. =1973 長野他訳『一般システム理論』みすず
書房

Cannon, Walter Bradford 1932 *Wisdom of the body*, Norton =1981 館他訳『からだの知
恵 : この不思議なはたらき』講談社学術文庫
この が機能分析にとって中心的

パーソンズが生物学的なシステム概念を多用したのと対称的に、マーソンの場合、生物
学的な議論はそれほど使われてはいない。

単一の概念に多様な用語

z.b.利用[use]、効用[utility]、目的[purpose]、動機[motive]、意図[intention]など
特にマーソンは、人類学での機能という言葉の使い方について、批判をしている。

cf. ここで混乱しまくっている文章の例としてあげられているのが、犯罪社会学の分化的
接触理論[differential association theory]で有名なサザーランド[Sutherland,
Edwin H.]。

2 - 2 - 2 . マーソンによる機能の定義

主観的意向(動機、目的)の諸概念

機能という言葉が主観的なものと混同されやすいので注意しなければならない。

客観的結果(機能、逆機能)の諸概念

混乱 社会(文化)システムへの積極的貢献に限定する傾向

混乱 動機という主観的なカテゴリーと機能という客観的なカテゴリーとの混同

- ・ 多様な諸結果 / 総結果の正味の差引勘定 [a net balance of the aggregate of consequences]

機能 [function] とは一定の体系の適応ないし調整を促す観察結果であり、逆機能 [dysfunction] とは、この体系の適応ないし調整を減ずる観察結果である。・・・どのような場合であれ、項目は機能的結果と逆機能的結果とをともにもつので、総結果の正味の差引勘定を秤量する基準を引き出さねばならない困難かつ重要な問題が生ずるのである。 :46

- ・ 主観的目論見 / 客観的結果

顕在的機能 [manifest function] とは、一定の体系の調整ないし適応に貢献する客観的結果であって、しかもこの体系の参与者によって意図され認知されたものである。これと関連して、潜在的機能 [latent function] とは、意図されず、認知されないものである。 :46

マートンによる機能の4 類型

顕在的機能	顕在的逆機能
潜在的機能	潜在的逆機能

マートンは、「潜在的機能の発見は、社会学的知識を大いに増進させる」[:62]と述べている。さらに言うなら、マートンにとって潜在的逆機能を発見するのが社会学者の仕事なのだ。

2 - 2 - 3 . 機能分析の事例

とりわけわかりやすそうなものを選びました。

事例1 : ホピ族の雨乞いの儀式:58-60

未開民族の迷信的な慣行として片付けられ、それだけで問題が解決されたと考えられている。しかし潜在的機能という概念があれば、この儀式は各地に散在する集団の成員が集合して共同活動に参加する定期的な機会であり、集団的同一性(集団のまとまり)を強化する潜在的機能を果たしているといえる。

雨乞いの儀式については、科学批判の文脈でもよく使われる。

z.b.Wittgenstein, Ludwig 1967 *Bemerkungen über Frazers The Golden Bough*. =1975 杖下隆英訳「フレーザー『金枝篇』について」『ウィトゲンシュタイン全集6』大修館書店、Pp.391-423.

事例2 : 政治的ボス組織:64-74 cf. 日本の党派政治みたいなもの?

潜在的機能による分析が、一般に行われている道徳的評価としばしば相反することを心得ておくべきである:64

アメリカ人の大部分にとって政治的ボス組織は、文句なしに「悪く」「望ましくない」。例えば、人選にあたってインパーソナル（非人格的）な資格に基づかなければならないのに、政党への忠誠心などに基づいているから。世の中から一掃しようと思えばできるこの組織が存続し続けるのはなぜだろうか。この公的には非難さるべき組織が、現在の諸条件のもとでは、基本的な潜在的機能を充足しているからである。

政治的ボスの中心的な機能は、当時の政治組織の全体に分散している「権力の断片」を円滑に作用するように組織し、集中化し、維持することである。公的には権力が分散しているが、権力の分散は、実際の決定や活動という点からすると困難さをもたらす（構造的脈絡）。

様々な下位集団に対して、政治的ボス組織は機能する。第一に、地方共同体や近隣社会に対して、援助をもたらす。第二に、企業集団に対して、経済利得（公共事業など）をもたらす。第三に、普通の個人的な出世街道から外れた人たちに対して、社会移動（要するに出世）をもたらす。

少なくとも、政治的ボス組織は、これらの様々な下位集団に対して、文化的に是認された構造やもっと慣例的な構造のもとでは十分に果たされていない機能を現に果たしている。:73

マートンの機能分析は、自分がどのような範囲のどのようなもの（集団？）を研究するのかを明確にし、それがどういう風に機能的でどういう風に逆機能的なのかを比較していくことを特徴とする。

【参考文献（出現順）】

- Davis, Kingsley 1959 "The Myth of Functional Analysis as a Special Method in Sociology and Anthropology", *American Sociological Review* 24-6, pp.757-772.
- Parsons, Talcott 1975 "The Present Status of 'Structural-Functional' Theory in Sociology", in Coser, Lewis (ed.) *The Idea of Social Structure: papers in Honor of Robert K. Merton*, Harcourt Brace Javanovitch Inc., pp.67-83.
- Calhoun, Craig, Light, Donald, Keller, Suzanne 1996 *Sociology (Seventh Edition)*, McGraw-Hill, Inc.
- Giddens, Anthony 1989 *Sociology*, Polity Press. =1992 松尾他訳『社会学』而立書房、巻末基本概念 p.5.
- Wallace, Rutha A. and Wolf, Allison 1980 *Contemporary Sociological Theory (First Edition)*, Plentice-Hall International Inc. =1985 濱屋他訳『現代社会学理論』新泉社